

明倫短期大学学会報告

在学中は、症例実習や患者担当制の実習形式から歯科医師と歯科衛生士との連携、プロ意識、患者の見える歯科技工から臨床力と実践力を高めるとともに、症例研究から自己評価力を養うことで、歯科技工士に求められる資質の向上を目指した。さらに、新潟国際ビジネスメッセ、インターンシップ、ボランティア、学外研修から社会性を養ってきた。これらは、学生の感想からも十分に教育効果があったと考えている。

さらに、平成20年度より「専攻科カード」を導入し、入学時の修学目標および在学時の情報を記録して教育や就職活動に活用するとともに、各学生には個別対応の指導体制をとっている。

今後も臨床力、実践力、社会性を重視した総合力の高い歯科技工士の育成を目指していきたいと考える。

第39回 (通算第122回) : 2009年6月25日 (木)

(座長: 大平芳則)

歯科衛生士学科学生の食生活状況から考える栄養指導教育

平澤明美 (歯科衛生士学科)

「健康日本21」では、朝食を欠食する人の減少が上げられ成人の目標15%以下とされている。しかし、平成19年国民健康・栄養調査によると朝食欠食率は年々上昇傾向にあり、20歳代女性が24.9%で目標値をかなり上回っている。そこで、平成12年～平成21年に本学歯科衛生士学科に在籍した、のべ1,083名に質問紙調査法により食生活状況の調査を実施した。(1)歯科衛生士学科学生の食生活状況は、全国の同年代女性より良い傾向にあった。特に、朝食欠食率は、1年では1人暮らし者と、寮生・自宅通学者の間に有意な差が認められた。また、寮生の臨地・臨床実習中の学年と1年の間にも有意な差が認められた。(2)「栄養指導」関連の授業が終了した学生は、栄養や健康についての知識があっても、臨地・臨床実習の影響があり、実践に結びついていない状況が示唆された。(3)授業で健康・栄養状態の改善について、実生活で継続可能な取り組みが必要である。具体的には①2学年後期の「栄養指導・演習」において、「健康と食事」をテーマに取り上げたグループ学習②簡単な朝食メニューの紹介や学生食堂との協力などを今後検討したい。

クラスデンチャーの可能性と限界 ～歯科技工士のアイデアを解き放せ！～

飛田 滋 (歯科技工士学科)

現在、日本の補綴歯科治療は、その技術と歯科材料の発達に伴い目覚ましい進歩を遂げているが、多種多様な部分的歯牙欠損症例の治療法は、クラスデンチャーに依存するところが多い。その構成要素である支台装置と義歯床の設定基準は明解でなく、製作者の裁量に委ねられている。高齢社会では有床義歯の補綴治療が占める比率は、年々増加すると予想されている。ゆえに患者がより快適にクラスデンチャーを使用するために、歯科技工士はエビデンスのある学識・技術を基にアイデアをフルに発揮することが必須である。今回は①鑄造鈎のアンダーカット量と維持力の関係②基本的鈎腕形態③鈎腕の内面研磨による維持力の変化、以上三項目の測定結果を提示しながら、クラスデンチャーでも如何に審美的かつ機能的に製作できるかを実際の臨床例を用いて紹介した。固定観念にとらわれず、難局に立ち向かう技術力こそが歯科技工士の持ち味であろう。

第40回 (通算第123回) : 2008年7月23日 (木)

(座長: 江川広子)

国語の修得能力と思考能力の 関係について

栗崎由貴子 (専攻科保健言語聴覚学専攻)

国語の修得とは、まず名詞を覚えてから動詞を覚え、それらを繋ぐための助詞を獲得し、文体を形成して表出するといった機械的な順序をたどるものではない。人間が何かを伝えるということは、まず、表現しようとする内容を自覚し、それをその国民特有の言語によって形成し、多様な文法に従って伝達するということがある。また、表現内容がより広がりをもたせ、それが論理的思考となって展開されていくためには、相応の日本語能力の獲得も必要になる。豊かな国語力を身につけるということは、日本語特有の心的表象を獲得しながら、その思考を自らのものとして「私」という人格の形成つなげてゆく過程でもある。このような段階を経てはじめて、ヒトは「人」として言語をコミュニケーションの道具として使いこなせるようになるのである。